

学生自治会を認めないと、いう宣言によつて始まつた。

「戦後ヨーロッパ式の大学からアメリカ式大学になつた新制大学になつて、学生が目にみえて変つたとは思いませんが」と松尾が言つた。

「旧制大学は少なくとも学問をするところであつたので、真理追究の気風もあつた。しかし学生が妙にエリート風であつたのは氣に入りませんが……」と語るのは、松尾隆のところによく書を打ちに来る哲学者の古在由重（一九〇一—一九九〇）であつた。

しかし松尾にとつては、どう制度が变ろうと、自分のところに集まる学生には変りなかつた。それに永年教師をした人間の悪いくせとして、出来の悪い子供ほど好きだつた。

シモーヌ・ド・ボーグワールは自伝的回想で「自分は優れた学生以外には興味がなかつた」といつているが、彼女は作家であつて、この点教師的性格ではなかつたからであらう。

ともかく松尾隆は四十九歳という短い生涯の中で、この出来の悪い子供たちを相手にして、「彼のことが悪いのです」と頭の隅を指して話されるくせがあつた。そしてそれらの人たちを実際によく世話をした。

ある時、教え子のSが本屋で万引きをして捕まり戸塚署に留置された。そのSのもらいをけにまつ先にかけつけたのは松尾であつた。

「困りましたの！」と言ひながらSのしりぬぐいを幾度続けたことであろう。Sは留置場で堂々とドストエフスキイの『罪と罰』論まで書かまくつてしまつたというが、そのSも松尾にとつては可愛い学生に変りなかつた。

また、警察大学に入ることにあつたのが吉田嘉清は高等師範部から大学の法学部に入った、柔道の有段者であつた。

彼は戦後の、学生運動華やかな時代を垣間見て、松尾隆の門をたたいた。そして学生運動に本腰を入れてつづ走つたが、慎重さに欠けていた。

彼の「早大事件」での行動などによつて、伝統ある早稻田の学生運動に終止符が打たれ、後は暴力的な学生運動集団の諸派が入り乱れる結果にならうとは松尾も知らなかつた。

しかし松尾にとつては知力に欠けているが、愛すべき、可愛い男であつたのだろう。その後吉田は、職業革命家を目指し、共産党下の重要な大衆団体で永年働いたが、その末路は党除名、その団体からも永久追放の目にあつた。

革命運動は、その指針が一通りでも狂えばおそるべき結末をもたらす例もあるので、同情すべき点もあるが、個人の責任は問われなければならないだらう。彼らがソドベージ反対で大学本部によしかけて建造物侵入の罪に問われた裁判で、特別弁護人をつとめて毎回、通算三十二回近く法廷に通つた。そこで私は、「法廷闘争」と称してあまりに荒削りで品位のない言動をとる被告たちに立ち会つて、彼らの良識の欠如に驚いたことがある。早稻田学生運動史にとつてこの時期（一九五〇年の前半期）が一つの盲点であるので、よくに注意を喚起しておきたいのである。

戦後、共産党の早大細胞の一代目のキャップであつた露文科の鹿島保夫は、松尾隆とも親しかつ

は九州島原の生れのためか、いつもシエンナーヤと発音しておられたことが懐しい。このあたり『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフや金賃しの老婆やソニヤの住家など、昔のままの姿で存在していることが一つ一つ確認できるのである。

木寺黎一の遺稿 ■

木寺黎一に遺稿六百枚ほどの「ドストエフスキイ」の芸術がある。それは未定稿のゆえに未発表であったが、実はペレヴェルゼフ原著 ТВОРЧЕСТВО ДОСТОЕВСКОГО の訳稿であった。木寺の死後三十有余年、一九八九年十月、長瀬隆訳で、『ドストエフスキイの創造』(みすず書房)と題して出版された。その書のあとがきを見ると、以下の記述があった。

「一九八六年十一月、教授に縁のあつたかつての学生たちによつて記念の集まりが持たれ、文集『松尾隆』(副題は「早稻田の疾風怒濤時代を生きた一教師」)(新製作社)が刊行された。その準備の過程で一連の未発表の文書が発見された。一つは小林秀雄の『ドストエフスキイの生活』に関する依頼原稿であり、いま一つは、『ドストエフスキイの芸術』と題された六百枚弱の文書であり、前者の全文と後者の最初の一章が文集に収録・公表された。

私が文書を入手したのは文集の発刊後であった。一年におよぶ調査と研究の後に、私が未読であつたペレヴェルゼフの論文の翻訳に相違ないと確信するにいたり、新谷敬三郎早大露文科教授に連絡し、早大図書館から借り出していたとき、一人でそうであることを確認したのである。」

これが本証書の成立の契機である。(傍点引用者)

私は「遺族からその遺稿を松尾隆記念行事会に貸し出されていたことはお聞きしていた。そのあとがきを読んで、私は長瀬がその訳稿を持つていると思い、松尾夫人に連絡をとつた。すると、松尾夫人から「庭の梅が満開ですが、まだ／＼寒い日が続いて居ります。お元気でお仕事をなさつて居られる事をおもうこひ申し上げます。お手紙拝見いたしました。夫の遺稿の事ですが、私共では読んでいたたく事に何の支障もございません。どうぞご覧になつて下さい。末筆乍らご健康を心よりお祈りいたして居ります。九七年二月五日」という返事をもらつた。私は長瀬にその旨を伝え、松尾の遺稿をみせてほしいと連絡した。長瀬との面会期日まで決めたが、長瀬からの一方的な面会キャンセルが突然電話で告げられ、今日に至るまで、彼との面会は実現していない。長瀬のこのような態度は、私にはどうしても承服しかねることである。この長瀬は、木寺没年時の弟子筋の早大生であるらしい。何事にも寛大であった木寺にしても、長瀬のこのような行為は納得できるものであろうか。

木寺はドストエフスキイ論を完成するのに間に合わなかつたが、自ら「果たしていつになつたら自分の仕事がまとまるかちよつと心細いが」と自省しながら、その断片を語る際にもきわめて慎重であった。

戦後木寺は小林秀雄『ドストエフスキイの生活』をやり玉にあげようとする『民報』紙の編集